EDF5×FGO AD.2022 地球防衛軍INカルデア

放仮ごdz

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０２２年。人類は、突如として現れた巨大な宇宙船団「プライマー」からの侵略にさらされ前代未聞の危機に陥っていた。

それに対するは全地球防衛機構軍、ＥＤＦの兵士たち。しかし奇襲により圧倒的不利と化した戦況で彼らは、偶然巻き込まれた民間人の踏ん張りによって立て直し反撃が始まった。

その民間人の名は藤丸立香。かつて、人知れず二度にも渡り世界を救った、人類最後のマスターであった青年である。

目　次

前篇　エアレイダー藤丸立香　――　1
後篇　人理を守る最後の壁　――　22

前篇　エアレイダー藤丸立香

２０１５年・・・否、２０１６年から２０１７年の一年間、人類史には妙な空白期がある。その間だけぽっかりと歴史が飛んでいるのだ。
常人には知り得ない事実ではあるが、その当時。ある者の手で人理は焼却され、そしてとある者達の活躍で人理修復が果たされた、そんな真実が歴史の闇に埋もれていた。

そして、時は２０２２年。地球は、前代未聞の危機に陥っていた。宇宙からの侵略者、巨大兵団プライマーの地球規模の進撃だ。
巨大な蟻、蜘蛛、蜂、ダンゴ虫の様な姿をした、大地を埋め尽くす怪物の群れ。
人間（どちらかと言えば人型の蛙）に酷似した、強力な兵器と再生能力を有するエイリアンの歩兵に、街一つを簡単に壊滅させる巨大怪獣。
どんな悪路であろうと長い脚を駆使して踏破し足に備えられた強力な兵器で蹂躙す

る三本足のロボットに、外敵の攻撃を全て防ぎ味方の攻撃は通すという反則紛いなバリアを展開し歩行する四足ロボット。

大地を悠々と歩き、砲撃の雨を降らす巨大な前哨基地。次々と大地に突き刺さり、怪物を転送する巨大な楔。

縦横無尽に大空を舞い人間のみを駆逐する無人ドローンに、怪物を投下する強固な黄金の装甲に包まれた地球外テクノロジーの塊である宇宙船団。

そしてレーザー一つで街を消滅させる、街程もある巨大な円盤、１０もの数が存在するマザーシップ。

そんな圧倒的な戦力を相手に、「全地球防衛機構軍」通称ＥＤＦは戦い抜いてきた。しかし戦況は絶望的。どんなに倒そうとも、次々と攻めてくる敵の物量にＥＤＦ隊員民間人問わず犠牲者は増え続け、数多く展開していた基地をも攻撃され資源も尽きそうになっていた。

それでもなお、戦いを続けるＥＤＦ。その中の一人。元々民間人であったものの、数々の戦果を上げて一部隊の隊長となった男がいた。

プライマー進軍の当初。関東のはずれの荒野の地下に築かれたＥＤＦの基地ベース

２２８。その装備を整備するため訪れていた民間人の作業員は、プライマーの基地襲撃に居合わせやむを得ず、特殊兵科であるエアレイダーとして戦いに赴く事になり、今や「ストーム1」と呼ばれている。そんな「民間人」が、数多くの戦果を挙げた手腕には理由があった。

その民間人の名は藤丸立香。かつて、人知れず地球・・・否、人理を救った人類最後のマスターであった男だ。

そしてエアレイダーとは、最前線に立って空軍に要請して指示を出し、数多のビークルを操る事に長けた、味方のサポート向けの兵科だ。他のレンジャー、ウィングダイバー、フェンサーなどの直接戦う兵科ならば彼はすぐにでも死んでいただろう。だが、かつての経験をフル活用できれば、怖い物なんてなかった。何故ならば。

――例えば、星の聖剣を振るい他を蹂躙する黒い騎士王。

――例えば、竜の大群を操りフランスを壊滅寸前まで追い詰めた竜の魔女。

――例えば、破壊の化身にして文明を滅ぼす者。

――例えば、人類史史上最強の大英雄。

――例えば、人理を焼却した魔術王との実力差。

――例えば、戦争がもたらす虚無と荒廃の化身。

――例えば、聖槍の女神と化したＩＦの騎士王。

――例えば、死という概念が存在しない回帰母神。

――例えば、裏切りの魔弾。

――例えば、快楽のまま生きた聖女。

――例えば、生と死を恐れて逃げた者。

――例えば、新たに造られた天の牡牛。

――例えば、宿業埋め込まれし悪鬼羅刹の七騎。

――例えば、外なる神の力を宿した虚空からの降臨者。

――例えば、凍り付いた人理。

――例えば、山の様に巨大な皇帝（ツァーリ）。

――例えば、終末の炎そのものである巨人王。

――例えば、外なる神と交信してしまった月の癌。

――例えば、愛憎に生きた人間嫌いの真祖。

――例えば、愛を与え人々を堕落させる女神。

――例えば、悪を排斥すべく創世と滅亡を繰り返した最後の神。

幾度も、何度でも、絶望を乗り越えたのだから。それらに比べたら今更エイリアンが、巨大怪獣が何だというのか。かつての仲間たちを頼る事も出来ず、慣れないながらも自らが出陣して戦い続けた男、藤丸立香。先日、巨大ロボットに乗って巨大怪獣を討伐したばかりである男の脳裏には、とある決意があった。

此方の資源が尽き掛けている。そんな報告を聞きながら敵の戦力を削っているそんな中、片耳に挟んだのだ。敵の戦力の一つである「テレポーションシップ」が、己の知っている物と同じ、もしくは同等の存在だという事を。

それは、インド神話に伝わる「天翔る王の御座（ヴィマーナ）」。それを有している男を、いや、王を。彼は知っていた。その力が、どれだけ規格外なのかも身を以て知っている。

専属オペレーターである娘が言っている「卵型の宇宙船に乗った神」には心当たりは無かったが、恩人であり戦友でもある軍曹達が一蹴しているその話が、現実に在る物だと直感した。そうとなれば、話は変わってくる。ＥＤＦの力を卑下するわけではないが、勝てる気がしない。

その「神」が本物かどうかは分からないが、それでもその恐ろしさは身を以て知っている。何せ直接戦い、他の神の力を借りたとはいえ倒した事さえあるのだから。

ではどうすればいい。仮初の基地に帰還してから自室で考えているのは、ずっとその事だ。実際にいるのだと証明する術は無いためＥＤＦの上層部には頼れない。唯一その存在を信じているらしいオペレーターも、半ば狂乱していて真面な会話は不可能だ。

「うーん、ティアマト並の巨体ならバルガも一溜まりもないだろうしな・・・バルジレーザーやフォボスが今持っている最高火力だけど、イシュタル並のスピードなら捉えられる気がしない・・・せめてエルキドゥがいれば神だし足止めできそうだけど、サーヴァント達の力は借りれないしなあ・・・やっぱり、皆がいないと俺は何もできないんだな」

自らの使える兵装を確認しながらうんうん唸り、自嘲気味に溜め息を吐いていた所に、自動ドアが開いて見慣れた男が小包を持って入って来た。軍曹、立香を民間人の頃から守り導いてくれた戦友だ。

「おい藤丸。お前に荷物が届いていたぞ。何時までもうじうじ悩んでいる暇があったら

少しは息抜きしろ。こんな戦況とはいえ、息抜きは大事だぞ」
「ああ、軍曹。ありがとう。・・・誰から?」
「人理継続保証機関フィニス・カルデア・・・とあるな。どこの研究機関だ?」
「!」

軍曹の口から出たのは、かつての職場の名前。立香は軍曹から荷物を受け取ると退席してもらい、一人になってから小包を開けた。その中にあったのは、一見トランクケースにも見える機械だった。

「懐かしいな。差出人は・・・やっぱり、ダ・ヴィンチちゃんか」

その名はトランク型守護英霊召喚システム・フェイト。莫大な電力を媒体にサーヴァントの召喚・契約・維持ができる代物であり、彼の仲間たちの霊基データが詰め込まれている。同封していた手紙を開いてみると、

『やあやあ。ご存知、天才のダ・ヴィンチちゃんさ。君は元気にやってるかな?活躍はＥＤＦの放送で拝見しているよ。マシュが心配だと言っていたから暇があったら連絡し

てくれたら嬉しいな。さて本題だが、ホームズがそろそろ君に必要だろうと推理したから送る事にした。こちらで七騎の英霊を呼び出す事ができる様に調整した。あとは雷並の電力を与えれば起動する。カルデアは表側で援助はできないけど、私たちは今でも応援しているよ。検討を祈る』

「・・・うん、彼女・・・彼?らしいな。これがあれば、皆を召喚して一緒に戦う事が出来る・・・一応、少佐に電力使用の検討と一応報告を入れておこうかな」

魔術師の存在を明かす事になったがこの非常時だ、しょうがないだろう。秘匿とか言っている戦況じゃない。魔術師もろとも地球が滅びそうな瀬戸際なのだ。片耳に挟んだ話だが、もしも負けたら生き残った人間は蛙の宇宙人・・・コロニストと同じように、クローンの材料にされ、人類は未来永劫プライマーの兵士として存在し続けることになるらしい。

そんなこと、させてはならない。自分の仲間たちが、過去の英雄達が歴史を作り築き上げてきた未来だ。自分達が守った未来なのだ。再びあの青空を取り戻す。藤丸立香はそう決意して、トランクを握り部屋を出た。

少佐に許可をいただき、電力なら有り余っているから自由に使ってくれと言われ、早

速召喚を行なう藤丸立香。それが大きく戦況を傾ける事となる。

まず必要なのは人材だ。怪物共を食い止める兵士がいる。この際、ＥＤＦの兵士も一緒に強くできれば最高だ。そこでまず召喚したのは槍使い（ランサー）、スパルタの王レオニダス一世。スパルタ教育によってウルクの民を魔獣の侵攻にも半年耐えれる様に鍛え上げた実績がある男だ。

「行きますぞムァスター！これがぁ……スパルタどぅぁあ!!　炎門の守護者（テルモピュライ・エノモタイア）アァァァァ!!!!」

「ウオォォォォォッ！スパルタ王に続けぇぇぇぇぇぇっ!!!!!」

そして彼の宝具は、守りにかけては頭一つ抜けている。召喚された三百人のスパルタ兵と、彼に鍛え上げられたフェンサー部隊が怪物たちの群れと真正面から激突して推し止め、千切っては投げ千切っては投げ・・・とまでは行かないが、勇猛果敢に撃退して

行く。中には、入隊したばかりで民間人上がりのひよっこが大多数だったがそれすら感じさせない猛攻である。

次に物資だ。基地を襲われ、蓄えが消えた。そこで立香が思い出したのは、円卓の騎士との戦い。召喚したのは祖国の英霊である弓兵（アーチャー）、退魔の英雄　俵藤太だ。

「さあ、行くぞぅ！　対宴宝具――――美味いお米が、どーん、どーん！みんな美味い飯をたらふく食えば、英気も養えるって物だ！」

無尽俵という世界共通にして永遠の厄災・食糧難を打倒する救いの宝具を有する彼の力によって、喪失していた戦意が甦り、戦線のＥＤＦ隊員たちが尽力した事で、１０あるマザーシップの一つに致命傷を与え、撤退させることに成功。さらに戦意が燃え上がる。

「またエルギヌスの群れの襲撃!?それに対してバルガが一体だけ!?・・・えっと、それなら・・・」

先日撃退した巨大怪獣の群れが再び攻めて来るというのに、唯一真面に対抗できる対巨大生物用人型兵器(元巨大人型クレーン)ギガンティックアンローダー・バルガがちょうどメンテナンスで一機しかないのだという。一機でも一匹倒すのに精一杯なのだ、あまりに無謀すぎる。そこで立香は、起死回生の一手に出た。

「立ち塞がるならば容赦はしない。行くぞ!騎士(ナイト・オブ・オーナー)は徒手にて死せず!」

バルガに騎乗し、その姿を赤い線の通った黒に染め上げたのは、剣士(セイバー)、円卓の騎士ランスロット。自らの手に触れた物を強化するその宝具によって、本来ありえない高機動性を見せたバルガの活躍により、巨大怪獣エルギヌスの群れは危なげなく撃退。ＥＤＦ最大戦力として名を馳せた。円卓最強の騎士、健在である。

次に必要だと感じたのは、防御力。マザーシップや前哨基地の砲撃や、圧倒的物量からの集中攻撃に何度も負けそうになった立香はそう結論した。召喚されたのは騎兵（ライダー）、勝利の女王ブーディカ。

「よーし……やるなら完全勝利と行こう！お姉さんに任せなさい。女神アンドラスタ……私に力を！――――守ってみせるっ！　約束されざる守護の車輪（チャリオット・オブ・ブディカ）！」

ブリタニア守護の象徴である仲間を守る「盾」が敵の砲撃の威力を悉く軽減し、犠牲を減らす事に成功。敵の脅威の一つを気にしなくてもよくなったことで士気がさらに上がった。

「・・・やっぱり、コスモノーツが一番厄介か。一撃必殺できれば・・・でも、キングハサンは魔力消費を考えると・・・」

蛙型とは異なる、いわゆる「グレイ」の姿をした上位種である宇宙人の兵隊コスモノーツの厄介さに頭を捻らせる立香。強力な武装もさることながら、何より厄介なのは防護服。強固なそれを破らなければ、強力な再生能力を持つ本体にもダメージは通らない。しかも装甲を剥がせば身軽になったのをいいことに高機動力で攻めてくる。ＥＤＦを絶望させた要因の一つだろう。なので、装甲ごと貫ける宝具を持つサーヴァントを喚ぶ事にした。

「よかろう。幾千幾万の血を流し、そして余に捧げよ。その血、その命を。血に塗れた我が人生をここに捧げようぞ。血塗れ王鬼（カズィクル・ベイ）！」

召喚されたのは狂戦士（バーサーカー）、吸血鬼ヴラド三世。体内で生成した杭を射出、敵を串刺しにする「串刺し公」。射程距離内に存在する物を取り込んで杭にするため、どんな装甲服を纏っていようが関係ないそれは、ＥＤＦの一部隊を壊滅させたコスモノーツの一団を瞬く間に殲滅した。

「くっ・・・コスモノーツを守るシールドベアラー・・・外側からの攻撃が通じないのは相変わらず厄介だな・・・。でも近付くにはコスモノーツの弾幕を掻い潜らなきゃいけないし、一撃で潰すには火力不足だ・・・ここは、専門家の出番かな」

ただでさえ厄介なコスモノーツを簡単に倒せる手段を用意すれば、プライマーが投下してきたのは、バリアを展開する四足ロボット・シールドベアラー数十体に守られ共に進軍してくるコスモノーツとコロニストの混成軍団。さらにはその周囲には全ての種類の怪物の姿が見え、意地でもシールドベアラーには近付かせないという意気が見えてくる構成だった。そこで立香が召喚したのは、隠密性に優れた「気配遮断」のスキルを持つサーヴァント。

「・・・うちのカルデアのアサシンは大概が対人特化な上に気配遮断スキル低い人ばかり

だから、封印してても気配遮断ＥＸの君を呼ぶしかなかったんだ。敵はセイバーじゃないけど、ごめん」

「何を言うのです！宇宙からの侵略者相手ならば、この謎のヒロインＸにお任せを！私はセイバーなので気配遮断など元より持ち合わせてはいないのですが、マスターの為とあらば使って見せましょうとも！さくっと近付いてかたっぱしからカリバー！して来ればよいのでしょう？楽勝です！騎士として、マスターの最強の剣として正々堂々と闇討ちを行いましょうとも！」

「騎士とはなんだったのか」

召喚されたのは自称セイバーな暗殺者（アサシン）、謎のヒロインＸ。もう訳が分からないがスペックは随一だ。宣言通り星光の速さでコスモノーツに悟られる事無くシールドベアラーに接近し、二本の聖剣を手に滅多切りした。

「アサシンと思ったうぬが不覚よ…！今、光と闇が交わりセイバーに見える！カタフラクティシフト！アサシンには無い王道の力を知れ！――――無銘勝利剣（エックス・カリバー）！」

馬鹿みたいに次々と空に吹き飛んで行くシールドベアラーの破片。異変を察知した

コスモノーツ達が警戒するも、その死角からヒロインXは無慈悲にその命を狩りに行く。

「小手調べです」「はっ！素早く！セイバー！」「こちらをどうぞ」「遅い！すごい！　速い！」

　さらには騎乗ＥＸスキルでＥＤＦのレンジャーが有する銃座付きのバイク、フリージャーをも乗り回して戦場を蹂躙し、支援砲撃ＥＸのスキルで怯ませたコスモノーツや怪物たちを一刀両断。ヴラド三世はいらなかったんじゃないかと思ってしまう程の大暴れでこれでもかとばかりにプライマーをかき乱す。それでも攻撃されるまで気付かれず、離脱すればすぐに見失ってしまうコスモノーツ達は混乱するばかり。山の翁以上の気配遮断は伊達では無かった。

参戦したサーヴァント六騎による助力で戦況を持ち直し、防戦一方から敵の母艦（マザーシップ）を攻めるまでに好転した戦況にまで持ち直したＥＤＦ。こちらの戦力増加を懸念したのか新たに出現した、他の物より一回り大きな円盤であるマザーシップ１１を攻める作戦に向かう道中、軍曹は立香に話しかけた。

「驚いたぞ藤丸。あれ程の力を持つ戦士たち・・・英霊だったか?を呼び出したばかりか、彼等に指揮までするとは。魔術というものを信じる気は無かったが、俺も考えを変えざるを得ない。レオニダス一世・・・あの様な王を始めとした戦士たちに鍛えられたとなれば、お前の戦果も納得だな!」

「いや、軍曹。少佐には基地を落とした英雄と呼ばれたけど、俺はそんなんじゃない。俺は何も凄くないんだ。ただ、運がよかった。周りの皆が凄かった。俺が不甲斐無いばかりに守れなかった命が数え切れないぐらいあった。・・・俺以外の人間がマスターだったなら多分、救えた命だ」

思い出すのは、この世界を取り戻すために対立した自分よりも遥かに優秀なマスター達。サーヴァントとして自らを支えてくれたロード・エルメロイ二世や英霊エミヤ達も

そうだ。自分より優秀なマスターは沢山いた。そう言って自らを卑下する立香に、軍曹は笑ってその肩を叩いた。

「うむ。詳しい事は分からんが、お前だからこそ彼らは、俺達は命令に従えるのだと思うぞ。言って置くが俺は、本部以外にはお前しか指示を聞く気はない。グリムリーパー隊だって、スプリガン隊だって、お前がこれまで共に戦い、散って来た兵士たちも同じだ」

「・・・でも、俺は・・・」

かつての仲間である英霊達を召喚し、その戦果と自身の戦果を比べてしまい沈んでしまっている立香へ、彼が民間人だった頃からの付き合いである軍曹は一喝する。

「いいか、よく聞け。ストーム1、藤丸立香。確かにみんな死んだ・・・だが、我々は生きている！彼等、過去に死した英霊達でも無い我々が、生きている者がやらねばならないのだ！・・・お前はどんなに絶望な状況になっても立ち続ける事が出来る。だから、我々は着いて行くんだ。それを努々忘れるな。少なくとも、俺はお前を信頼している。その信頼に応えてくれないか」

「・・・ああ、軍曹。俺は、戦う！勝って見せる！せっかく二度も取り戻した世界を、あ

んな奴等に奪われてたまるか！」
「ああ、その意気だ！」
軍曹の言葉に、何時も自分を信じて守り抜いてくれた、後輩の姿を思い出す立香。そして――――最後の戦いが始まる。

マザーシップ11を守っていたエイリアン部隊やテレポーションシップを撃墜し、他のマザーシップを呼び出し始めたプライマーの旗艦と思われるマザーシップ11を追い込んだ立香たち。
追い詰められたマザーシップは変形し、多数の砲台となった外輪部から濃密な弾幕を繰り出すも、ブーディカとレオニダスの防御、ヴラド三世と俵藤太、ランスロットとヒロインXの迎撃もあって撃退。
軍曹たちストームチームの援護を受けた立香の搭乗した強化外骨格型歩行兵器ニク（コンバットフレーム）

ス　グレネーダーＭ２の攻撃によりマザーシップ１１を大破させる事に成功。
　大爆発し空に散って行くマザーシップ１１の姿に、プライマーとの戦いに終止符を打ったと確信した立香達。しかし、歓喜に沸くＥＤＦの前に姿を現したのは、予想だにしないものだった。

『・・・神話では、卵型の宇宙船から神が降り立った、とあります。マザーシップ１１が卵型の宇宙船、だとするならば・・・藤丸さん、気を付けてください・・・。アレが・・・神です!』
「・・・神?あれが・・・?」

　オペレーターの言っていた「神」。――――一言で表すならば、「銀の人」。そうとしか、形容できない巨人が、崩壊したマザーシップ１１から現れた。

後篇　人理を守る最後の壁

マザーシップ１１を撃墜し勝利を確信していたエアレイダー、藤丸立香率いるＥＤＦ隊員達の前に降り立った絶望。

金の装飾をところどころに付けている、全身銀色の人の様なそれは他のエイリアンとは違い、何も装備していない人型のナニカ。中空に浮かぶそれは後光すら差していて、オペレーターの言う「神」だとも納得できる圧倒的な存在感だった。

最初は本部の命令で拘束を試みるも、抵抗したため攻撃を開始したのだが・・・銀の人は自由自在に空を舞い、手から光弾やレーザーを繰り出してきたかと思えば、光の環から通常と重装甲それぞれのコスモノーツを大量に召喚。さらにはその迎撃に駆られたＥＤＦ隊員たちに向けて光を纏い突撃し、炎を纏った足でストンプしたかと思えば、背中の金の環からノーモーションでプラズマ弾が放たれる。予想もできない多才な攻撃に殲滅されて行くＥＤＦ隊員達。

『なんだ!?奴はなにをしている!?何か武器を持っているのか!?』

「あの兵器は一体なんだ・・・!?」

『これまで遭遇して来たエイリアンは、全て武装していました。しかし、この巨人は武器を持っていません』
『光を操り、空を舞う。まさに、伝説の通りです・・・アレが神です・・・!』
『神か・・・だとしてもエイリアンの神だ。地球には必要ない!』
『コマンドシップに搭乗していた事から、王や皇帝に相当する支配者・・・あるいは軍の司令官。重要人物だと思われます。どちらにせよ、プライマーにとって致命的な打撃となるでしょう。コマンドシップによる消耗もありますが、撃墜してください!』

本部の総司令や戦略情報部の女少佐、その部下のオペレーター等に通信であれこれ言われるが、立香には現場で共に戦う隊員たちのぼやきさえ頭に入っていなかった。常識はずれの戦いを繰り広げてきた彼の記憶と照らし合わせても、正体不明の得体のしれない存在。考えることは今まで、仲間たちがしてきた。自分は信じる通りに動いて来ただけ。だからこそ、分からなかった。
非武装の敵から放たれる圧倒的な攻撃の数々。超能力(サイコキネシス)と思われる、万能であるとしか思えないその姿はまるで・・・

「魔術、師・・・?」

「危ない！ムァスター！」

次々と殺されて行く隊員たちの姿に、放心していた立香に向けて放たれた光弾を盾を手に受け止めるレオニダス。しかし出力が違うのだと言わんばかりにあっさりと吹き飛ばし、杭と矢を放って攻撃していたヴラド三世と俵藤太も簡単に薙ぎ払われる。ブーディカが必死に隊員たちを守り、ヒロインXとランスロットが剣を手に立ち向かうもまるで歯が立たず、炎を纏ったストンプで吹き飛ばされる。英霊ですら圧倒するそんな相手に、臆してしまう立香。

「・・・クソッ、兵力を整える事やら兵糧の事で頭がいっぱいで人選を誤ったか？少しでも、火力の高いサーヴァントを召喚するべきだった・・・でも、今更そんなこと言ってられない！撤退は出来ない！レオニダス、ブーディカさん！頼む、全力で守ってくれ！」

「「おう！」」

プライマーの元締めとも言えるその存在は、圧倒的な強さで地球など敵ではないと言わんばかりにＥＤＦと英霊達を一蹴し腕を組んで見下していた。

「クソッ、堅い装甲ならバルジレーザーで・・・！」

立香が誘導装置を取り出し照準である赤いレーザーを銀の人に向けるも、要請した衛星レーザーが発射するべくロックオンする前に自由自在に空を移動する銀の人から照準レーザーが外れてしまい、ならばと地面に向けて照射して起動、直後にレーザーをずらして当てるという今まで機動力の高い敵に対して行ってきた荒業で対抗するも放たれた衛星レーザーは掠りもしない。レンジャーやら直接戦える兵科なら戦いようはあるのだろうが、基本支援要請するしかないエアレイダーではあまりに分が悪かった。

「駄目だ、速過ぎて当たらない！」

空軍に敵の位置を知らせるビーコンガンも掠りもせず、手も足も出ない立香。サーヴァントたちと違い戦士ではない自分では、ろくに当てることも出来ない。ランスロットたちや軍曹たちに任せるしかない、と歯噛みする。

さらには残るマザーシップもこの場に集結しつつあり、全滅を覚悟せざるを得ない状況。しかし、この最悪の状況下で少佐が発動した「オペレーションオメガ」は、立香には許容できない物だった。

もう戦える戦力はいない。そのため全ての人類、つまり素人同然である民間人をＥＤＦの兵士として全戦力を投入し、世界中のマザーシップを揺動して足止めする。もちろん用意できる装備など無い。全人類を捨て駒にする。正真正銘最後の作戦だ。そんな少佐の通信に怒りをぶつけるのは、民間人を決して見捨てず、軍人として守る事を信条とする軍曹だ。

「何の装備も無い民間人に戦えと言うのか!?」

『時間稼ぎにはなります！』

「全員が死ぬぞ！神風を祈って僅かな生存者を犠牲にするのか!?」

「それだけは駄目だ！俺達が戦って来たのは、戦えない人達を守るためだ！」

「「「「「「誰もいない地球を守ってなんになる！」」」」」」

その時、軍曹と立香、そしてサーヴァント六騎の叫びが合致した。思いは一つ。

『ど、どんな…どんなに犠牲を払おうと、この行為にはそれだけの意味が…我々は勝たねばならないのです！』

「少佐！貴女に初めて物申しますが、俺の尊敬する看護師が言っていたんだ！失われた命より、救われる命の方が多くなったとき、螺旋の闘争はいつか必ず終わるのだと！救われる命すら無くなったら、それでこそこの星は終わりなんだ！過去に生きた人達が繋いできた全てが無駄になるんだ！異聞帯を滅ぼしてまでこの世界を取り戻した意味がなくなる！そうなったら俺は、みんなに顔向けが出来ない！」

「藤丸、無茶だ！」

そう言って、手にしたビーコンガンを手に、銀の人に向けて突撃する立香。咄嗟にそれを止めようとする軍曹だったが、コスモノーツの放って来たレーザーを目の前に出て防いだ筋肉…レオニダスに制止された。さらに二筋の流星がミサイルを斬り捨て、謎のヒロインXもその場に降り立った。

「ご安心なされよ、軍曹殿。彼は我らがマスターです。マスターとは第一に、生き残ることが必須ですからね。特に足は私直々に鍛えさせていただきました」

「ええ、我々のマスターは特に目が良くてですね！それに悪運もいい！あの程度の弾幕

じゃマスターには届きませんよ」

　そう言う両者の信頼を一身に受け止め、走る立香。降り注ぐ光弾を跳躍して避けるも余波を受けて転がり、それでも立ち上がって銃口を頭上に浮かぶ銀の人へと向けた。

「俺はどうなったっていい、生きてさえいれば何でもできる！当たらないなら、近づくしかないだろ！」

　そう言って、一回転して振り下ろしてきた炎を纏ったストンプを、横っ飛びで回避しながらビーコン弾を発射。

『こちらＤＥ―２０２、目標に攻撃開始する。エアレイダー、藤丸立香。君の頭上には我々が居る事を忘れるな！』

「ああ、忘れてないさ！いつもありがとう！俺達なら、奴を倒せるはずなんだ！」

　銀の人の胸部に付けられたビーコンの要請を受け、上空に飛来したガンシップから放たれたロケット砲が銀の人の胸部に炸裂。巨体をよろめかせて倒れそうになるも、空中

で踏ん張り再び腕組みして立香を見下ろす銀の人に、立香はヘルメットの下で不敵に笑んで振り返る。例え見えなくても、仲間が安心できるような声色で、藤丸立香は高らかに声を上げるのだ。

「それに、奴は俺の知っているような神じゃない。太古の昔に人類に文明を授けた張本人？だからどうした。この惑星は、都市は、ウルクを始めとした人類、地球人が何千年もかけて築きあげてきた文明だ！俺達人間は奴らの家畜なんかじゃない！あいつは魔術師もどきの、邪悪な侵略者だ。ドレイク船長も言っていた。弾が当たる、血が出るなら殺せる！そうだろ、みんな！」

「「「「おう!!」」」」

背中の環を変形させて高速で移動してきた銀の人の巨体による突進を、それ以上の高速で空を駆ける馬車に乗ってきたブーディカに回収され、難を逃れる立香。その周りには、頼れるサーヴァントたちがいた。

「ブーディカさんとレオニダスはこのまま防御に専念して、皆を守って！ヴラドはそのままコスモノーツの迎撃を！」

「お姉さんにまっかせて！」
「行くぞ、異星人！これがスパルタだぁあああああっ！」
「よかろう。串刺しの時間だ、我が領土のみならず地球に土足で乗り込んできた侵略者共よ！」

飛び降りた立香の指示で三者三様に動き出すブーディカ、レオニダス、ヴラド三世。ＥＤＦの兵士たちと共にコスモノーツを駆逐していき、ブーディカの戦車から飛び降りた立香は側に控える俵藤太、ランスロット、ヒロインＸと共に銀の人へと突き進んだ。

「藤太さん、ランスロット、ヒロインＸは俺と一緒にあの神もどきを叩くぞ！」
「よし！」
「お任せを！」
「行きますよ、マスター！掴まって下さい！」
「頼んだ、Ｘ！」

機動力がまるでないエアレイダーを補うべく、二振りの約束された勝利の剣（エクスカリバー）から噴き出るエネルギーをジェットエンジン代わりにして空を飛ぶヒロインＸに掴まる立香。

銀の人の放つ光弾を避けて高速で駆け抜けた。

「俺達もいくぞ、藤丸！」

「お前こそ奴らにとっての死神だ、小僧」

「我ら遊撃部隊ストーム！お前についていくぞ！」

　すると軍曹が率いているレンジャー部隊ストーム2、精鋭のフェンサーのみで構成されたグリムリーパー隊ストーム3、ウィングダイバーのみのスプリガン隊ストーム4と、立香…エアレイダーのストーム1をリーダーとした遊撃部隊ストームが集まり、サーヴァント共に銀の人へと立ち向かう。

「スプリガン隊を…なめるなあ！」

「ここがお前の死に場所だ…！」

　スターダストキャノンを連射して銀の人の正面を削りながら上空へ舞い上がるスプリガン隊長に続いてスプリガン隊が上空からレーザー兵器を一斉掃射し、グリムリーパー隊長のブラストホールスピア二撃目が炸裂。

二発ごとに威力が上がる性質のフェンサー用の武器は銀の人の腹部を貫通して見せ、続けざまにグリムリーパー隊が盾を手にして防御しながら一斉に突撃して次々と攻撃を浴びせる。

体勢が崩れた所にレンジャー部隊の弾幕と共に銀の人の動きを抑圧、さらに軍曹が専用武器であるレーザー砲、ブレイザーを放って銀の人の左足を破壊することに成功する。

ＥＤＦ最高戦力の連携攻撃に銀のメッキが剥がれ落ちるどころか片足まで失って余裕を持てなくなった銀の人は両掌を下に向けて光線やプラズマ弾を放つも、もとより高機動力のフェンサー&ウィングダイバーどころか、ろくな機動性を持たないレンジャー部隊にさえ見切られ、避けられてそちらにくぎ付けになったところに、軍曹が叫んだ。

「今だ、ストーム1！」

「ああ軍曹！藤太さん、宝具を！」

「では、やるか！南無八幡大菩薩……願わくば、この矢を届け給え！」

立香の指示と共に、俵藤太は愛用する五人張りの強弓を力のかぎり引き絞り、銀の人へと狙いを付けて彼の宝具八幡祈願（なむはちまんだいぼさつ）・大妖射貫（このやにかごを）を解き放つ。放たれた矢は龍の幻影を

纏って空を駆け、軍曹たちを薙ぎ払おうとしていた銀の人の炎を纏ったストンプと激突、弾いて押し返して見せ、ＥＤＦ隊員の歓声が上がった。

「ランスロット！」

「あの娘の生きる地球は奪わせん！――――――最果てに至れ。限界を超えよ。彼方の王よ、この光をご覧あれ！縛鎖全断・過重湖光！」

続けて跳躍したランスロットの、愛剣無毀なる湖光に過負荷を与えて籠められた魔力を漏出した、湖の様な青い光を纏った斬撃が銀の人の左腕を両断。大ダメージに聞き取れない絶叫を上げる銀の人。さらに駄目押しだと言わんばかりに謎のヒロインＸに掴まった立香が飛来した。

「ヒロインＸ！ぶちかませ！」

「星光の剣よ。赤とか白とか黒とか、あと銀とか消し去るべし！ミンナニハナイショダヨ！無銘勝利剣！」

謎のヒロインＸが二振りの約束された勝利の剣による斬撃の連撃を銀の人の胴体に

炸裂させる、その直前に。立香自身は銀の人に謎のヒロインXが接近したのと同時に、その眼前に跳躍。手にしたリムペットガンから放たれた小型榴弾を銀の人の頭部に炸裂させ、さらに起爆。胴体に斬撃の嵐を、頭部に爆撃を浴びた銀の人は空中でダウンし、その動きを止めた。

「セイバーに遭えばセイバーを斬る。神に遭えば神を斬る。主にセイバーばっかり増やす神を！こいつがその神だったら万々歳です！」

「…それはないんじゃないかなあ。でも、これなら…決戦前にトランクで召喚しておいた最後の一騎が来る前に、倒せたんじゃ…」

「おっとマスター。そいつはフラグという奴ですよ！」

謎のヒロインXに受け止められて地面に着地し、一息ついていた立香。しかしその前で、銀の人は再び動き出して失ったはずの四肢が再生、背中の環を絵にかく太陽の様な形状にすると光り輝き始め、銀の人はさらに上空に浮遊。そして、絶望が飛来する。

「巨人が光り輝いている!?これは…」

『藤丸さん！逃げてください！はるか上空、宇宙から高速で飛来する物体を大量に感知

しました！神の…本当の姿です！』

「隕石だって!?」

銀の人を中心として、宇宙から飛来して市街地に降り注ぐ数えきれない数の隕石（メテオ）。超能力で引き寄せたであろうそれは、サイズはそれほどでもないが、重力による加速と摩擦による熱を帯びたそれの威力は絶大で。ＥＤＦ隊員が、ストーム隊が、サーヴァントたちが、なす術もなく吹き飛ばされていく。藤丸立香は隕石という死そのものに対しても、驚きはすれど臆さない。なにせ魔弾…これ以上の巨大隕石と相対した時すらあったのだから。

「あのサイズなら…ヒロインＸ、頼む！」

「そうですね！こうなったらなりふり構っていられません！約束された勝利の剣（エクスカリバー）!!」

かつて、特異点となった新宿に藤丸立香を標的に撃ち込まれた超巨大な隕石（最後の魔弾）を破壊したのは、正義の味方の残骸と、反転した黒い騎士王の聖剣。謎のヒロインＸはその聖剣を二振りも扱える。

黄金に輝く聖剣から上空に振り放たれた極光が大量の隕石を消し去るも、すぐに補充

され先程以上の隕石が飛来。立香は咄嗟に跳躍して逃れ、同じく空中に逃れた謎のヒロインXは二撃目である黒い聖剣をまるでバットの様に頭上に振るった。

「セイバーホームラン！約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）!!…これでも駄目ですか。マスター、もっと魔力を！」

「ごめん、もう俺の魔力も…少佐からもらった電気を変換した魔力も、底をついて…」

「なんですと!?ぐはあ！」

　再び隕石群を薙ぎ払い、それでも降ってくるそれらに謎のヒロインXの要求に、立香は首を振ると、それに気を取られていたヒロインXに銀の人の炎のストンプが炸裂、吹き飛ばされてしまう。

　多大な魔力を消費する宝具を連発したのだ。現在もレオニダスとブーディカが防御宝具を展開していて、特に魔力消費の大きい聖剣を連発するほどの余力はもうなかった。さらに召喚される重武装のコスモノーツの大軍。銀の人の親衛隊であろうそれは、ほぼ壊滅状態のＥＤＦとサーヴァントたちの蹂躙を始める。既にエイリアンを迎え撃つ戦力は底をついているが、それでもと戦うＥＤＦ。それに応える様にサーヴァントたちも奮起する。

『途方もないエネルギーを生み出す超存在…生物の域を超えています…!』
「ああ少佐、アレはもうサーヴァントの宝具級だ…あんなの、もうどうしようも…」
『これだけの犠牲を払ったのに…英霊達でもどうしようもないなんて、みんなは一体何のために…!』

オペレーターの悲痛の声に何も言えなくなる立香。ビーコンガンを撃っては見るも、先ほどより高所に移動した銀の人には当たらない。ビークル要請として、あの高さに対抗できて質量の伴う攻撃で大ダメージを与えられるだろうギガンティックアンローダー・バルガを呼び寄せた物の、あのスピードじゃ拳を当てる事すら敵わないだろう。さらに銀の人が掌から光弾の雨を降らせ、隕石から逃れ続ける人間を駆逐する。まさしく万事休す。

『奴は疲れと言う物を知らないのか!?コマンドシップを破壊したところで、奴を倒せなければ意味がない!』
『思考を物理的なエネルギーに変換できるということは、理論的に尽きることのない力を持っていることになります。魔力に限りがあるストーム1のサーヴァントたちとは

真逆の存在です。もし逃したら…全ての犠牲が無駄になります！なんとか！何とかしてください！』

「奴のパワーは無限という事か…でも、血は出ているんだ。不死身という訳じゃない筈だ。あんな神様より恐ろしい、それこそ世界を幾度も破壊し創世した神を俺は知っている…それに比べれば！何より、七つの世界を犠牲にして取り返したこの世界を、失わせてなるものか！」

『そうは言うが藤丸…もう戦える戦力はない、我々は壊滅した…！いくらストーム１でも、あの化け物相手に何ができる…』

『投入可能な戦力無し…チェックメイトです。受け入れるしか…』

「まだだ、まだ俺達がいる！諦めたら何にもならないぞ！こんなピンチなんて何度もあったんだ、これぐらい…何とかして見せる！」

「そうだねマイ・ロード。やっぱり君は英雄の器だ。この私が保証しよう！」

「え…？」

そこに現れたのは、この戦場に似つかわしくないラフな服装をした優男。Ｃａｍｅｌｏｔ＆Ｃｏという霊衣を身に着けたその男は、列記とした立香のサーヴァントであり、「冠位（グランド）」の魔術師（キャスター）。生粋のキングメーカー、花の魔術師マーリンであった。

「やあマスター。久しぶりだね。高みの見物していたらいきなり呼ばれたものだから、急いで徒歩で来たとも！私の出番かな？やぁ、こいつは手強そうだ」
「道理で召喚してから来るのに時間がかかったわけか…というかなんて格好で来てるんだマーリン!?」
「まあまあ。ちょっとバカンスをね。まずは立て直しをしよう。無限のエネルギーが何だとも。君にはこの私がついているじゃないか！星の内海、物見の台（うてな）。楽園の端から君に聞かせよう……君たちの物語は祝福に満ちていると。罪無き者のみ通るがいい――永久に閉ざされた理想郷（ガーデン・オブ・アヴァロン）！」

詠唱と共にその宝具が発動、戦場である半壊した街にマーリンを起点に花畑が咲き誇り、その花弁を受けたＥＤＦ兵士たちの傷が癒えていく。サーヴァントたちも魔力が回復し、重装コスモノーツを押し返し始めた。

『これが話に聞いたグランドクラスのサーヴァントの力…これほどとは。これならば勝機があります！』
『そうだ少佐、これまでも絶望を打ち砕いてきた彼に全てを賭けよう。もはや、我々にで

きることは祈る事だけだ…ストーム1。まさか人類そのものを背負わせる事になるとは…！』

「大丈夫です本部！また背負えばいいだけだ！」

無線で託されると同時に、ちょうど落下してきたバルガに乗り込もうとする立香に声がかけられる。隕石で吹き飛ばされたものの、マーリンの登場で何とか回復して駆けつけた軍曹だった。

「藤丸。お前は誰よりも強く、勇敢だ。やるべきことは分かるな？」

「ああ軍曹。決まっている。ＥＤＦの皆や英霊達…この星に生きた命に代表し、奴等に一発喰らわせる！」

「ああそうだ。行って来い！ストーム1！」

軍曹に背中を叩かれて後押しされ、バルガに搭乗して起動する立香。彼のサーヴァントには、メカエリチャンと言うちょっと特殊なサーヴァントがいる。その時に培った操縦技術（仮）をフルに使い、さらにランスロットがバルガの肩に飛び乗り騎士は徒手にて死せずで宝具化。普段鈍重な動きしかできないバルガを走らせ、コスモ

ノーツを押しのけて銀の人に接近して拳を叩きつけようとするも、落下位置を調整された隕石に邪魔をされ、プラズマ弾の高速連射を受けて背中から転倒してしまった。さらに隕石が集中して降り注いできて大ダメージで黒煙が燻り出すバルガ。

「くそっ…隕石が邪魔だ！このままじゃあいつを一発も殴ることなくバルガの装甲が削られて終わる…！」

「マスター！隕石は私とランスロットでできるだけ斬り捨てます。藤太さんも出来る限り援護してくださるそうです！」

「マスターは奴を倒すことだけに集中を！」

追撃とばかりに落ちてきた隕石を、約束された勝利の剣（エクスカリバー）で薙ぎ払いつつ空を駆けてきたヒロインXと、バルガの肩で無毀なる湖光（アロンダイト）を振るって隕石を切り刻むランスロット、地上から龍の幻影を纏った矢を放ち隕石を撃ち抜き爆散させる藤太のサポートを受けつつ、背中のブースターを噴射させて立ち上がり、両拳を掲げて回転させるバルガ。

「俺はみんなを信じる、行くぞ！終わらせる！」

それを見て銀の人は分かりやすく後退し、隕石を滝の様にバルガ目掛けて落下させてきた。英霊達ですら対処できない物量で落とす気なのだろう。しかし隕石はバルガには当たることなく擦り抜け、困惑する銀の人へ距離を詰めるバルガに、それを行ったマーリンがバルガの後方で笑みを浮かべる。

「残念。それは私のスキル「幻術」だ。ふむ、さすがは生粋の降臨者（フォーリナー）と言ったところか。一筋縄ではいかないね。だが、私から見れば君は既に彼らの英雄だとも。だから駄目押しだ。キミに全チップを賭けよう。頼むぞ～？」

するとマーリンのスキル「英雄作成」が立香を後押しし、速度の上がったバルガの拳が、咄嗟に銀の人が防御に使おうとしたのか落ちてきたバルガほどもある巨大な隕石を真正面から打ち砕き、銀の人の胴体を捉えた。

「!!!!?!?!!?!!」

聞きなれない絶叫を上げ、銀メッキを散らしながら紫色の体液を吹き出しつつ、両手両足がもがれて吹き飛ぶ銀の人。さらにバルガは距離を詰めて追撃。およそ機械仕掛

けから繰り出されたとは思えないキレのある拳が銀の人の顔面に突き刺さり、さらに猛ラッシュを銀の人に叩き続ける。

「マルタさん直伝…ヤコブ神拳ッ、だあ!!」

強攻撃（バスター）の連打、連打、連打。隕石がバルガに落ち続けるもサーヴァントたちに迎撃され、重装コスモノーツを召喚してもやはりサーヴァントたちとＥＤＦに瞬く間に対処され、銀の人は再生する暇もなく環からプラズマ弾を連射してせめてもの抵抗を試みているが、まるで効果がなさず殴り続けられる。砂塵と花弁が舞い、紫の体液が飛び散り、あまりにも無茶な動きでバルガから黒煙が燻り、火花が散る。

『ストーム１！』
『神が、苦しんでいます！終わらせてください！この悲劇を！』
『『ＥＤＦの誇りにかけて!!』』
『『名誉にかけて!!』』
『やれ！ストーム１！』

「うおぉおおおおおおおおおおおおっ!!」

徐々に、徐々にスピードが落ち始めるバルガの拳。銀の人のボディも赤熱し始め、どちらも限界だと分かる。そして、環から放たれたプラズマ弾がバルガを撃ち抜き、ついに大破。しかして英雄は倒れず、全身全霊でコックピットから飛び出した。何とか右腕だけ再生させて、立香に向けて掌をかざし緑のレーザーを放つ銀の人。しかしそれを、どこからともなく投擲されてきたラウンドシールドで防がれ、立香はその盾に乗ってさらに跳躍した。

「今の盾は…?」

「ムァスタァァァァァッ!これをッッ!」

「使え!藤丸ッ!!」

そこに目掛けて、地上からレオニダスが投擲して立香の手に握られたのは、軍曹のブレイザー。立香は自身の窮地を救ってくれた盾のことはひとまず忘れて、眼前に迫る銀人へと銃口を向けた。

「オオオォォーーーーーッッ！」

横から手が迫ってくるが、関係ない。軍曹から、ＥＤＦのみんなから、サーヴァント達から託された、地球の命運を背負ったこの引き金を引いて、長きにわたる戦いを終わらせる。人類最後のマスターとして、守って見せた地球を再び取り返す！

「Ｅ！Ｄ！Ｆッッ!!」

そして、銀の人の顔面に激突。両足を踏ん張って銃口を突き付け、言い慣れた掛け声と共に、プライマー打倒を掲げて開発された兵器が火を噴いた。

『やったぞーーーーーーー!!』

『人類は勝ったーーーーーーー!!』

『聞いたか!?』

『なんてこった!』

『ハハッ、やりやがった!』

『『『ＥＤＦッ！ＥＤＦッ！』』』

「…俺の勝ちだ、侵略者」

歓声を聞いて、半壊したヘルメットの下で一人笑みを浮かべて黄昏る立香に、駆け寄

る仲間たち。零距離から頭部を撃ち抜かれた銀の人は、赤熱した身体を崩壊させて地面に崩れ落ち。人類は宇宙からの侵略者相手に勝利したのだった。

人類最後のマスター、後に英雄と呼ばれる男…藤丸立香の手によって。

「…先輩は、私が守ります。間に合って、よかった」
「まったく。もうデミサーヴァントでもないのに、素の筋力であれを投げちゃうんだから君は。そうだ、これからトランクを回収しに行くけどせっかくだ。君も会ってくるかい？」
「で、ではお言葉に甘えて…」
「数年ぶりの生立香君だ、堪能するといいさ。マシュ」